

『鎧と十字架』(二)

三、アメリカへの旅立ち

九月廿二日 郵船会社汽船信濃丸にて横浜港を発す余の行を送らるゝもの小波先生春浪漁史渚山湖山葵山其の他二三子なり⁽¹⁾。

荷風が父の勧めで米國に留学を決意し、日本郵船信濃丸の船上の人となつて横浜港を出港したのは明治三十六年九月二十二日のことであつた。その前日には木曜会のメンバーが、清水谷開香園で激励会を開いてくれた。会に出席した人達が、翌日に旅立つ荷風を横浜港から見送つてくれたのである。荷風があれほどに憧れていたフランスでなく、米國留学を決意したのは、父親が学費を出して勧めたからにはほかならない。それと同時に人生諸々に於いてすべてがうまくいかない現状を打破したい気持ちもあつたことは間違いないであろう。理由はなんであれ並々ならぬ決意を秘めて外國に旅立つたことは次の言葉が証明している。

浅原義雄

今の世の中では吾々が西洋へ行くといふ事は、丁度サヴオアの山人が煙筒掃除に巴里へ出稼に行くやう、或は越後の米搗が御江戸へやつて来るやう、何か知ら或物を握つて帰らねばならぬやうに解釈されてゐます。洋行したくせに、帰つて来てても何にもしないといふ事はいかに其の人の無智無能であるかを証明する語として使用されます。単に精神上的の転地療養として外國の文明を見て来たなぞと、そんな不生産的な遊戯は、許すべからざる罪惡のやうに見做されてゐます。ですから、私も旅費を出してくれた父への面目のみならず、知己朋友に対しても、西洋へ行つて来たが最後、故國の社會に向つて何事か為す所あらねばならぬやうな考を、知らずく抱いてゐました。自分には果してそんな力があるかないかをも反省せずに、酔興にも誰からも頼まれず強ひられもしない責任をば、自分勝手に感じてゐたものです⁽²⁾。

明治の時代にあつて「洋行」は、外国旅行に十代の若者さえ気軽に出かけて行き、海外渡航者も百万人を越えた時代となつた現代とは訳が違う。「単に精神上的の転地療養として外国の文明を見て来たなどと、そんな不生産的な遊戯は、許すべからざる罪惡のやうに見做されてゐます」の一節は、その時代に渡航した人間すべてに重く大きいのしかかつた言葉である。その当時の日本は日露戦争の戦勝気分も冷めて、年頭から東京株式市場相場が暴落して日露戦後の恐慌の影が忍び寄つていた頃である。富国強兵・殖産興業のスローガンのもとに明治政府が近代化を促進していった結果、欧米諸国に肩を並べるほどに国力が向上したと国民に自負心が生じつつあつた時期とはいへ、海外渡航は普通の庶民にとって終生無縁の高嶺の花にすぎなかつた。そして明治の末年頃に海外に行くものは、一部エリート①の留学や學術研究か商用目的の視察が主体であつた。そのことは明治三十六年九月のパスポート発行記録である外国旅券下付表に記載されている（七五九八四・永井莊吉・士族・久一郎長男・愛知縣愛知郡鳴尾村十七番戸・明治十二年十二月生・北米・修学・全上）の前後を見れば一目瞭然である^②。一般市民が海外へ行くのは、貧しさ故に閉塞状態あつた環境から新たな可能性を求めて仕事を探しに別天地に飛び出していくのが通常である。庶民が海を越え異国に向かうのは出稼ぎ労働者がほとんどであつたと言つてもよいであろう。そのような社会状況にあつて二十四歳にもなつた荷風が米國

留学できたのも、文部省の高級官僚として局長まで上りつめた後に日本郵船上海支店長に天下りした父親の援助なしには到底不可能であつたことは論をまたない。

父久一郎が息子荷風をアメリカ留学させた理由は、『西遊日誌抄』の中で荷風自身が述べている「そもそも余が父は余をして将来日本の商業界に立身の道を得せしめんが爲め」に他ならないであろう。アメリカ留学の恩恵は、永井久一郎自身が身をもつて知つていたからである。永井久一郎は、秋庭太郎著『考證永井荷風』によれば、名古屋藩の貢進生として大学南校で学んだ後、明治四年に米國留学している。彼は「プリンストンの大学に学び、次いでニューブランズウィキの大学に転じ、英語のみならずラテン語をも修得した」^④。明治六年に帰国してからの経歴は、秋庭太郎著『新考永井荷風』に詳しく述べられている。彼は明治七年工部省勤務、八年文部省書籍館兼博物館の館長補佐、十年東京女子師範学校教諭兼幹事、十二年内務省衛生局統計課長、十八年衛生局第三部長、十九年帝国大学書記官、二十二年文部大臣首席秘書官、二十四年文部省會計局長、三十年退官後日本郵船上海支店長、三十三年から四十四年まで横浜支店長、その後はロンドン支店長候補にあげられるが大正二年に卒した^⑤。この履歴が出世コースかどうかは人によつて評価が分かれよう。いずれにしても薩長でなければ人にあらずの明治新政府にあつて、名古屋藩出身の永井久一郎が文部省會計局長までのほりつめて日本郵船に天下りできたのも、アメリカ留学の輝かしい経歴が物を

言っているのは間違いない。彼が学業も放棄して放蕩無頼に近い生活を送る息子を米国に留学させようと考えたのは、青春時代に過ごしたアメリカの空気を直に吸わせて極道息子を再生させようとした意図からであろう。いくら自分が勤務している会社とはいえ、久一郎は荷風を「信濃丸」の一等船室に乗せて外国に旅出させてやっている。この客船は三等級に別れ、一等は政府高官や富裕な人達、二等は政府の役人や留学生、三等は出稼ぎ労働者が乗るのが普通であった。その上に慣れぬ外国暮らしの辛さや不自由さを少しでも解消させてやろうとして、知人が経営する古屋商店タコマ支店の支店長宅に最初は下宿させている。これもひとえに息子可愛さがなせるわざであろう。

荷風の外遊期間は、明治三十六年九月二十二日「信濃丸」で横浜港出港から、明治四十一年七月十五日「讃岐丸」での日本帰国まで四年十ヶ月あまりに及んでいる。そのうちアメリカ滞在は、ワシントン州タコマに約一年、ミシガン州カラマーズに訳七ヶ月、ワシントン州約四ヶ月、ニューヨーク約一年八ヶ月で四年弱滞在したことになる。大まかに分類すればタコマ時代、カラマーズとワシントン時代、そしてニューヨーク時代の三つの時期に分けられる。タコマ時代は、父親の保護の下に古屋商店タコマ支店支配人山本一郎の援助によるアメリカ生活の適応期間である。タコマで荷風がいかに過ごしたかは、この時期に書かれた四つの短篇『船室夜話』、『舍路港の一夜』、『夜の霧』、『牧場の道』で推察できる。カラマーズ時代は、今後どの

ようにして生きるか煩悶した荷風が、精神的自立を目指した時期である。ニューヨーク時代は『あめりか物語』の大半が書かれた期間で、渡仏の方策を模索しつつ娼婦イデスと運命的な邂逅をした時期である。

永井荷風のアメリカでの大雑把な足跡を辿ると、『西遊日誌抄』によれば次の通りになる。

一九〇三年

九月廿二日 郵船会社汽船信濃丸にて横浜港を発す

十月 七日 加奈陀のヴィクトリア港に着す

十月十九日 タコマの市街と其の公園を散歩す

十月廿四日 舍路港シヤトルポウに赴き知る人を尋ねんとて午前九時過電

気鉄道に乗る

一九〇四年

十月 八日 聖路易市万国博覧会に赴かんとて愴惶旅装を

と、のへてタコマを去る

十二月廿二日 カラマーズに着す

十二月廿八日 短篇小説「岡の上」を脱稿し得て木曜会に寄す

一九〇五年

一月廿七日 家尊郵船会社の所用を帯びミネソタ号に乗じて

太平洋岸の舎路シャトルに來りし

六月十五日

ペンシルベニア州山間の一小市に勉学せる××子を見んが為め夜八時八分の汽車にてカマラツを去る

六月三十日

正午の汽車にてキングストンを去り其日の夕五時紐育ニユーヨークに着す

七月 八日

余は直にヘラルド新聞に奉公口を求むる広告を出しぬ

七月十五日

華盛頓ワシントン日本公使館にて身元正しき小使一名入用なりとの事を聞込み△△子に其の周旋を依頼したり

七月十九日

公使館小使聞届けられし旨返事ありければ直に旅装を準へ正午ペンシルベニア鉄道の停車場を出発す

八月 三日

モオパッサンが紀行「水上」を読む

八月廿九日

父は予の仏蘭西行にはいかにするとも同意しがたき旨申來れり

九月十三日

一酒舗の卓子にコクテール傾くる折から不図わが傍なる女の物云ひかくるがまゝに打連れてポトマック河上の公園を歩み遂に誘はれて其の家に至る

十月十六日

余は当月一ぱいにて不用なる由申渡されたり

十一月一日

いよいよ此の首都を去るべき日も明日となりぬイデスの家に別離の盃を酌む

十一月二日

余は米国人の家庭に住込み如何にしても渡欧の旅費を得んと欲す

十一月十一日

再び学校生活を続けんと思返しミシガン州なるカラマツ村へと旅立ちぬ

十一月廿四日

父は故国にて□□銀行の頭取と会見し余をして其の紐育出張店の事務見習員たらしむる事を依頼

十二月 五日

マンハツタン座に赴きてモンナワンナを観る

十二月 六日

メトロポリタン歌劇場に「ハンゼルとグレテル」を聴く

十二月 七日

嗚呼余は遂に□□銀行に入りたり

十二月十四日

この夜サッフオーを見る

十二月十六日

リイリツク劇場にサラ夫人の技を見る。

十二月十八日

ヘラルド・スクエア劇場にオルガ・ニザソオル嬢の「カルメン」を見る

十二月廿三日

サラ夫人が紐育興行最後の晩なり△△子と共に行きてサルドオ作妖妃を見る。……嗚呼余は幸にして世界「Fagedienne」の技藝を親しく目観する事を得たり余が渡航の目的は達せられたるなり

十二月廿八日 短篇小説「岡の上」を脱稿し得て木曜会に寄す

一九〇六年

一月三日 歌劇フワストを聴かんとてメトロポリタン歌

劇場に行きしが席已に売切となりたるれば台帳のみ購求め附近の酒場に入り音楽を聞きつゝ之を読む

一月四日 歌劇リゴレットの台帳をよむ

一月五日 ワグネルがトリスタン演ぜらるゝ日なり銀行より直に馳せ赴く

一月六日 伊太利亜歌劇ドンバスクワレを聴く

一月七日 酒場に食事し一瓶の葡萄酒に陶然としてハンガリアの俗歌に旅愁を慰む

一月七日 日曜日なり西区八十九丁目なる仏蘭西人の家に行李を移す主婦は六十ばかり余はこれより日々

仏語の会話を練習するの機会を得たるを喜ぶ

一月 八日 プツチニが歌劇トスカを聴きに行きぬ

一月十四日 十四丁目辺の酒場に俗謡を聴く

一月二十日 紐育美術学校の油絵展覽会を見る感服すべき作品は一つもなし亜米利加は駄目なるかな

一月廿二日 ワグネルのタンホイゼルを聴く

一月廿三日 先頃一読したるゾーミツクの仏国文学史も今は

再読し終りぬゾラがクロオドの懺悔も最後の一章を読み余すのみ明夜は市立図書館に赴見るべし

し

二月 二日 ヒツポドロムの曲馬を見る

二月 三日 ウエルジが傑作歌劇アイダを聴く

二月 九日 ロチの作ロマン・ダン・スパイを読む

二月十六日 ロオヘンダリンを聴く

二月廿二日 メトロポリタン劇場午後よりワグネルの聖曲パ

ルシフワルを演奏す

三月 三日 歌劇ルチャ・ヂ・ランメルモオルを聴くカルウ

ゾ能く歌ふ

三月 六日 楽劇ワルキユウルを聴く

三月 十日 ワグネルがライン物語の清後の演奏諸神の夕暮

を聴く

三月十六日 チオコンダを聴かんとて行きしが満員空席なし

三月十八日 カアネギイ音楽堂に開かれたる露西亜管弦楽を

聴く

三月十九日 俳優マンズフィールドの演ずるドンカルロスを見る

三月廿二日 秩序的に聊か西洋音楽の何たるかを知らんと欲し斯道の著書数冊を購ひ読む

三月廿四日 近頃評判よき狂言スクオーマンを見物す

三月廿九日 メンデルゾン楽堂に催さる、ヴァイオリン四部演奏会を聴く

四月 二日 この移民町には又仏蘭西の貸本屋ありてドオデ

モオパッサンなぞの小説もそなへたり

四月二十日 露国モスコオより来れる俳優オスレネフ一座東

区の移民街にて興行す。行きて観る

四月廿三日 余はこの湾頭遙に大西洋を望めばまだ知らぬ仏

蘭西の都と其の芸術の恋しさに今の我が身の果

敢なきを思ひ無量の悲愁に打沈めらる

五月廿五日 去年ミシガンの客舎にて起草したる短篇「春と

秋」を浄書し巖谷小波先生のもとに送る

五月廿七日 「長髪」と題する一小篇を脱稿し得て再び木曜

会に寄す

六月十一日 短篇「雪の宿」の稿を清書して太陽に寄送す

六月十七日 セントラル公園日曜日毎に音楽を演奏す

六月廿二日 モオパッサンが短篇集メイゾンテリエを読む

六月 九日 人なき公園の樹下に坐し携へたるモオパッサン

の詩集を読み半日を過しぬ

六月廿七日 仏蘭西語の夜学校に赴く

七月 八日 イデス巳に紐育に在り

七月 十日 そもそも余が父は余をして将来日本の商業界に

立身の道を得せしめんが為め学費を惜しまず余

を米国に遊学せしめしなり。子たるもの其恩を忘れて可ならんや然れども如何にせん余の性情遂に銀行員たるに適せざるを

モオパッサンの作ベルアミイを読みはじめ

七月十六日

仏蘭西語の夜学校に赴かんとて晚餐後マチソン

四辻の樹陰を過ぐるに、夏の黄昏尽きて正に夜

ならんとする街上の光景画にて見る巴里の如し。覚えず佇みて空想に耽ける

七月十九日

七月廿二日

短篇「夜半の酒場」を稿す

七月廿六日

八月廿三日

フロオベルがエヂュカツション・サンチマンタルを読む

朝銀行に赴く列車の中にてモオパッサンを読む

余は遂に仏蘭西を見る事能はずして空しく米国

より早晚日本に呼戻さるべき身と思へばデトールの媪が仏蘭西語もて物語る巴里のはなしは聽て余の身に取って何事にもかへがたき形見となるべし

八月廿五日

時に手帳を取出し日頃腹案せる長篇小説お筋書

なりと書きつけたしと思ひしが何となく心のみ

八月廿六日

いらだちて書く事能はざりき
マンハツタン座に入りブランシユ・ワルシのクルツツエルソナタを看る

九月十七日 病よからず臥床の中にもモパッサンのイヴエ

ツトを読む

十月 三日 図らず書肆ブレンタノの前を過ぎたれば入りて

モオパッサンの「ロンドリ姉妹」を購ひ、それよりイデスの家を訪ひ晚餐を共にす

十月十四日 午後には蘭西の媪デトウルを訪ひ蘭西語の練

習なしたる

十月十六日 余は蘭西語にて給仕人に料理を命じ微酔し

つ、巴里の新聞を一覧す

十月二十日 ピネロが作 His house in order を看る

十一月 三日 仏蘭西の音楽家カミル・サンサン此夜カアネギイ楽堂に演奏会を催す由聞きたれば馳せ赴く

十一月 十日 カアネギイ楽堂に紐育シンフォニイの演奏を聴

く

十一月十七日 十三丁目の劇場にマンテル一座のマクベスを看

る。書肆ブレンタノに赴き斯の道の書物数冊を購ひ帰る

十一月廿六日 巴里のオペラより招聘せられたる俳優此の夜グ

ノオの歌劇「ロメオ、エ、ジュリエット」を仏蘭西語にて謡ふ

十一月廿八日 メトロポリタン劇場にタンホイゼを聴く

十一月廿九日 午後バーナードショーが作シーザーとクレオパ

トラを看

十二月 五日 歌劇リゴレットを聴く

十二月 八日 歌劇フォウストを聴く

十二月 十日 ベルリオが歌劇ダンナシヨン、ド、フォーストを聴く

十二月十五日 ビゼが歌劇カルメンを聴く

十二月十六日 いつもの如くシヤンパンに酔ひ黒奴が歌ふ流行

唄をきく

十二月十七日 プツチニが歌劇ボエームを聴く

十二月廿一日 クリスマス前の賑ひを見んとて燈火の街を散歩し書店ブレンタノに入りて蘭西新着のツルゲ

ネフ伝を購ふ

十二月廿八日 歌劇ラクメを聴く

十二月卅一日 独ブロードウエーの酒亭に葡萄酒傾け携へたるラマルチンが詩集を読む

一九〇七年

一月 四日 三度ビゼがカルメンを聴く

一月 五日 メトロポリタン歌劇場にワグネルがジイグフリイトを聴く

一月 六日 小篇の稿を終へたり「旧恨」と題す

一月 七日 始めてミュツセが悲しき詩を読む。余は今日ま

で幾度か英詩に興を得んとして失敗したり然るに一度仏蘭西語も綴られたる詩を読むや余は茲に始めて韻文の妙味を解し得たるが如き心地せり

一月 八日 あ、美しきミュツセの詩よ余は銀行内にありても折あらば窃に衣嚢より一卷を取出して黙読せり

一月 九日 再びロメオ・エ・ジュリエットを聴く

一月十二日 マンハッタン劇場に四度カルメンを聴く

一月十三日 イデスの家に遊ぶ隣室に巴里より来れる女あり

此夜卓を共にして晚餐をなしかかの都のはなしに一方ならぬ興を得たり

一月十六日 マンハッタン歌劇場にモザルトがドンゼヨワンニを聴く

一月十七日 雪降る再び八十九丁目なる仏蘭西の媪デートルが寓居の一室に移る。再び朝夕美しきフランス語聞き得る事のうれしさよ

一月十九日 ロオヘングリンを聴く

一月二十日 午後カアネギイ楽堂に仏人ドビユツシイの作曲

演奏せらるゝ由聞きたれば行きぬ

一月三十日 マンハッタン歌劇場にカワレリヤルスチカナニ

場イルパリアツチ一幕を聴く

二月 二日 トラキアタを聴くデユマの原作椿姫をウエルヂ

が歌劇に仕組みたるものなり

三月十七日 空の色日の光漸く春めきぬハドソン江上の船舶を看る

(これより七月までオペラに関する以外日誌の記事抄録すべきもの全くなし)

七月 二日 何たる意外の事ぞや銀行本店より通知書あり仏

蘭西里昂出張店に見習雇一名入用なるにつき即

刻紐育出張店の余を其の方へ向くべしとの事なり

り

七月 九日 イデスと別盃をくむ

七月十八日 午前九時仏国汽船ブルタンユ号ハドソン河口の

波止場を出帆す

およそ四年間にならんとする荷風のアメリカでの生活は、一言でいえば渡仏への準備期間であったことは『西遊日誌抄』で一目瞭然である。特にアメリカ滞在の後半部分は、逃れようのない現実から目を背けるために音楽の世界へ逃避していった姿が鮮明に現れている。

荷風はアメリカ上陸当初は、違う環境への物珍しさで新鮮な感動も覚えて現地の生活にひたすら適応しようと腐心したことは推察に難くない。しかし、「洋行、と云ふ虚栄の聲に酔ひ」(『寢覚め』)し

れて、「二ヶ月、二ヶ月位は、何が何やら夢中で暮して了つたが」
〔寢覚め〕、やがて時が経てばその感動も薄れ、募るのは日本恋し
さの望郷の念であろう。次の言葉はその当時の荷風の正直な気持ち
であろう

で、日一日三月半年と経ては経つほど、日常生活の不便と境
遇の寂寥を感じるばかり。時々堪えられぬほど朝風呂に入っ
て見たい気がしたり、鰻の蒲焼に一杯熱いのを引掛けて見たく
成つたり、兎角に考えが、故郷に馳る⁽⁶⁾。

心の中ではいくら日本に帰りたいと思つても、横浜港を歓呼の声
で送られてアメリカに來たのであるから、そうおめおめと簡単に帰
国できるわけがない。現地の生活に早く適応できるかできないかの
鍵は偏に語学力にかかっている。十代の若いときなら、おぼつか
ない会話力でも恥をもとせず積極的に立ち向かつていられる。
何不自由のないお坊ちゃん育ちの荷風がアメリカに渡つたのは二十
代半ばである。人種差別の激しかった当時のアメリカでは、町中の
買い物一つにしても抵抗感が強かつたであろう。どうしても人との
接触を断つて孤独な生活に向かわざるを得ない。それには煩わしい
街の雑踏を離れての散策が最良の方法である。事実、荷風が最初に
滞在するタコマは、風光明媚な地で散歩には最適の場所である。

天気好かりし故タコマの市街と其の公園を散歩す。街の静な
る事は殊に余を喜ばしめき。公園に入れば車馬の声いよく
遠く草は尚青く柔に生茂りたれど木々の梢は半黄ばみて早くも
瀟々たる初冬の眺めをなしたり。首を回らせば邦人タコマ富士
と呼ぶなるモントレニヤ白雪を戴きて雲間に聳ゆ風光頗佳⁽⁷⁾。

出稼ぎに來た日本人がどん底の苦しい生活の中で、望郷の念に駆
られて命名したタコマ富士の光景は、荷風に日本の山河を偲ぶ絶好
のよすがとなつたのであろう。そのことは明治三十四年の十一月に
巖谷季雄に宛てたでも十分に窺い知れる。

なか／＼風景よき田舎街なれば、田園的詩趣を味ふによる
しく候、タコマ富士が頭上に聳つ、ある海辺に出て、大なる黒
鯛をつるやら、山の手の落葉中に松茸狩りをなす杯なか／＼
面白く御坐候松茸の大なる事は吃驚仰天する位に御坐候其の外
林檎の農園を散歩し或は牧場の垣根に腰をかけて読書するなぞ
大に詩人的に御坐候羊を追う少女の姿の美しきは是非にも葵山
先生の作中に用ひらるべきものと存ぜられ候目下は語学の稽古
より外には何にもする事無之候先は右まで⁽⁸⁾

荷風は散策中に立ち寄つた人気のない公園の木の下で、「野草の
上に臥して樹間に仏蘭西の詩集を読む時ほど幸福なる事はなし」

〔西遊日誌抄〕と実感し、「亜米利加は全く余をして多感の詩人たらしめし歟」〔西遊日誌抄〕と言わせるほどの精神的余裕を持った。これは小説家永井荷風を形成するのに重要な成長過程である。タコマでの散歩は、「読書思索観察の三事は小説かくものの寸毫も怠いてはならぬものなり」〔小説作法〕の実践に他ならないであろう。タコマ周辺の散策で荷風は風景描写の目を養うのである。最初の頃の「打仰げば、風死したる大空は夜毎の闇に閉され、顧みれば、朦々たる狭霧地上を罩めんとす」〔夜の霧〕のような大時代がかった紋切り型の表現から、『野路のかえり』に見られる次のような繊細な文体にレベルアップしてくる。

灰色に曇った空の、夜にならば雨か、夢見る如く、どんより重く暮れはて、行く。湖のやうな広々した水の面が、黒く鉛のやうに輝き、岸辺一帯を蔽う繁りは、次第々に朧ろになつて、その間からは、黄いガス燈が瞬きしはじめた。

絶えず、あたりの高い榆の木の梢からは、細い木の葉が、三四枚、五六枚づつ、一団になつて、落ちて来る。耳を澄ますと、木の葉が木の葉の間を滑り落ちて来るその響が聞きとれるやうに思はれる。木の葉同士が、互に落滅を誘ひ囁き合うのであらう^⑨。

異国の空で無聊を慰めるために、荷風は自然の風物の移り変わり

に眼を向けて、自然の景色に研ぎすまされたやうな鋭敏な感覚を次に養つていくのである。空の色を一心不乱に眺め、風の音にじつと耳を傾ける荷風の姿勢は、帰国後の彼の作風を方向付ける重要な土台となるのである。タコマの自然は、『すみだ川』の作者を孵化させる準備期間と言えなくもない。

朝夕がいくらか涼しく楽になつたかと思ふと共に、大変に日が短くなつた。毎朝起きて見るたびに竹垣に咲く朝顔の花の輪が小さくなつて、西日が燃る焔のやうに狭い家中へ差込んで来る時分には、近所一面に鳴く蝉の声が殊更に調子急しく聞える。八月も半ば過ぎてしまつたので、竹垣を越して裏手の玉蜀黍の畑に吹き渡る風の響が、夜などは折々雨かと誤られた^⑩。

「読書思索観察の三事」に必須の条件である散策は、日常生活に忙殺されては不可能で、絶対的な余暇の時間が必要である。遊興に身を持ち崩しそうになつた日本での生活環境を改め自省するには、荷風にとってアメリカでの生活は理想的であつたといえよう。

人間は矢張一度寂寞の中に身を置かなくては不可いねえ。東京に於ける僕の境遇は作家としては余りにも賑か過ぎた。家の庭には花がある。外へ出れば藝者が居る。此れでは到底自然などを顧る暇がないからねへ。僕も其れで近來は幾分か狂熱的に

たつた様な心持がするよ⁽¹¹⁾。

アメリカでの生活は時間的な余暇をつくり、「読書は閑暇なくては出来ず、いわんや思索空想また観察においてや」(『小説作法』)の環境づくりにはもってこいであつた。しかし、よく観察してみると、アメリカの文物は荷風の精神においては何の影響も与えず、彼に日本人であることを再認識させる結果にもなつた。

然し生れ付きの性格はとも変化しない。亜米利加も今の処では別に此れと云ふ影響を与えない。僕は一面非常に西洋崇拜のハイカラだけれども一面は又頗る保守的な処があるのだよ。此の保守的と云ふのは則江戸式天明振りの若旦那思想と云ふのかも知れないさ。僕は洋服のハイカラ姿を好むと同時に前掛に煙草入雪駄チャラ〜と云ふ姿を忘れる事が出来ないのさ⁽¹²⁾。

荷風はアメリカを自由の国と思つていたが、保守的な側面が強くあることも痛感させられた。アメリカは自分の新たな可能性を求めて運命を切り開く別天地ではなく、「この世はいずこへ行こうともみな同じ苦役の場所である」(『牧場への道』)ことの再確認の場となつたのである。次の一節は荷風のアメリカでの生き方を探る上で重要である。

且やタコマは米国中での一僻遠の地芝居もほんの田舎まはりの旅役者が来るばかりである。歐洲の其れには無論比すべくもあらずだが然し日本に居るよりかいくらか西劇の何たるかを知るには便利である。近頃は大分独逸のワグネル楽劇が米国に流行り出した。オペラに関する書物は目下紐育へ注文にやつた。其の中に届いたら一生懸命に此方を研究したいと思つて居る⁽¹³⁾。

「荷風は明治時代を通じて、文学者になることをはつきり目的として、そのためにだけ外遊した唯一の人です」と、評論家中村光夫氏は『《評論》永井荷風』の中で述べているが、最初から確固たる自信に満ちてこの道に進んだのではなく、いろいろと自分の進む道を模索した結果として文学者の道に進んだといった方が正確であろう。一時期荷風は日本でオペラ作家として生きることを真剣に考えていた節がある。荷風は母親の影響もあるうが、幼い時から琴、三味線など、和楽器には人一倍慣れ親しんでいた環境にあつた。荷風が十二・三の頃から音楽学校の演奏会を聞きに行つたが、西洋音楽はよくわからず日本固有の音楽が肌にあつたことは明治四十二年に「早稲田文学」に書いた『音楽雑談』でも明らかである。事実、十六歳の時に漢詩作法を学ぶ傍ら、荒木古童に弟子入りして近古流の尺八を本格的に習っている。その腕前は明治三十八年にカラマズ・カレッジにおける課外活動の文学サークル発表会でバンブー・フル

ート(尺八)を演奏して拍手喝采を浴びていることでも実証される。自分が慣れ親しんだ日本の和楽器の世界に、洋風のオペラを導入しようと考えたのは先見の明があったともいえる。仏語は暁星の夜学校で積極的に学んでいるが、はつきり言えば英語は苦手の部類に入る荷風にとって音楽は入っていきやすい。荷風がオペラにのめり込んだ理由は次の言葉が一番よく説明しているであろう。

西洋へ行つては、其時を機会としてまづ第一に音楽を聞かうとした。然し西洋の音楽は単音の日本音楽のみを聞いて居た耳では騒々しいばかりで、少しも美感を誘はなかつた。而して純粹の大きい音楽よりも寄席の流行唄とかオペラ類似の踊に伴ふ卑俗の音楽の方が却つて面白かつた。然しさう言ふ音楽は要するに生命のない俗受専門の物語そればかり聞いて居るとすぐ飽きて来て、それ以上のものを要求するやうになつた。それで私は今度は純粹のオペラの方へ赴いた⁽¹⁴⁾。

荷風はアメリカの地を踏むまでは、ニューヨークは利益の追求だけを求める経済中心主義の国と理解していたようだ。しかし、富に任せて世界各国の一流の音楽家を招聘して音楽の万国博覧会的な様相を呈している現状を見て、フランスから帰国した直後の明治四十年に読売新聞に「それ故、一時に各国の異なる音楽を聞き分けやうとすれば、自分は世界の都と云う巴里よりも寧ろ紐育の方が便利

である」(「欧米の音楽会及びオペラ劇場」と述べるほどであった。そういう時期にアメリカに滞在できた荷風は幸運であつたいうべきであろう。そのために本格的に勉強しようと思ひ立ち、ニューヨークではひたすらオペラの公演を聞きに行き、その合間にはオペラ関係の書物も買い集めていることは『西遊日誌抄』で歴然としている。帰国直後に書かれた『帰朝者の日記』に登場する西洋音楽研究家の主人公は、荷風がアメリカで描いていた帰国後の日本での己の姿かもしれない。

自分は日頃から腹案して居る歌劇の脚本の第一頁に筆を下して見た。其れは『隅田川』と題して梅若丸の事績を仕組まうとするので、水の流れ、落葉の響き、葦のそよ音などに秋の黄昏の寂寞悲哀を示す短い前奏を聞かせた後は、伊太利近代の歌劇作家MascagniのCavaleria Rusticanaにならつて、幕を引上げない以前に、濁つた流れに終日絲を垂れて居ても魚はつれないと云う貧しい漁夫の歌を独唱させるつもりである⁽¹⁵⁾。

日本でいくらか放蕩三昧に明け暮れていても、たえず机に向かつてものを書くことを日課としていた荷風は、環境の変化もあろうがアメリカではいっこうに筆が進まない。この苦しい時期の煩悶は『西遊日誌抄』の明治三十七年一月五日の日記と、タコマから生田墓山に宛てた明治三十七年二月二十七日付けの書簡でよくわかる。

亜米利加に來りてより余が胸裏には藝術上の革命漸く起らんとしつゝあるが如し近時筆を執れども一二行すら満足には書き能はざる蓋し此の如き思想混乱の結果たらずんばあらず。余はゴーチエーの如き新形式の伝奇小説を書きたしと思ふ念漸く激しくなれりと雖も今だ其の準備十分ならず徒に苦悶の日を送るのみ註。余は従来書き來れる言文一致の形式につきても亦大なる不満足を感じ出せり。身海外に在るが故にや近頃は何となく雅致に富める古文の味忘れがたく行李を開きて平家物語榮華物語なぞ取出し独り炉辺に坐して夜半に至る⁽¹⁶⁾。

翻つて余は当地へ來て以來氣ばかりあせつて少しも筆を進める事が出来ない。余は筆を取つて以來今日此頃程書けない事は一度もない。自分ながら不思議でならぬ位だが、思ふに此れは境遇が激変した爲めであろう。最初の中は非常に主観的に傾いてゐるやうであつたが近頃は追々亦昔の様に冷静に客観する事が出来るやうになつた。然し何となく感興が起らなくて筆をとつても一枚やつと書く位で到底駄目だからもうしばらく何もせぬつもりである⁽¹⁷⁾。

荷風が書けなくなつたのは、異境の地での環境の激変もあろうが、従來の小説の手法に行き詰まつたからにほかならない。彼が「ゴ

チエーの如き新形式の」小説を追求して苦闘したのは、「余は遠く故国の伝説道徳習慣あらゆるものより隔離して天涯千里の異域に放浪孤独の悲愁を愛する身なり」(『西遊日誌抄』)と自覚し、アメリカの大地で自分を見つめ直した結果であろう。筆が一步も進まない荷風の煩悶はそうとうなものであつたと思われる。いくら時間的余裕があつても、そのまま創作活動に直ちに没頭できるものではない。そこまでに到達するには精神的煩悶の時期を得なければならぬ。創作意欲がおきなれば読書で時間を潰すしかない。しかし、いくら「雅致に富んだ」日本の小説を読みたくとも、アメリカに持ち込んだ和書は数に限りがある。必然的に現地ではいるのは洋書と
言うことになる。

作物が出来ないので一時は実に云はれぬ程煩悶したがいくら煩悶しても感興が湧かねば駄目だとあきらめて近頃は専心読書に耽つていさゝか素養するつもりである。此間仏国小傑作集と云ふ六冊本でフローベル、ゴーチエー、メリメー、モーパッサン、バルザック、ドーデの短篇をあつめて新刊を読んだが、まだ日本の文壇には訳されないである好いものが沢山ある⁽¹⁸⁾。

アメリカ文学が肌に合わない荷風が仏小説に向かうの当然のことであろう。荷風の四年にもならんとする米国での生活は前にも述べたように、悲願の地フランスへ向かう準備期間であり、文学者とし

て大成する瞬化の時期であつたのである。荷風が明治三十八年四月十三日に米国ミシガン州から生田葵山に宛てた書簡の言葉が、的確に証明している。

目下は閑静な田舎の学校生活、毎日牧場や果樹園で半日暮すから自然と思想が叙情的になる様だ。べつにともちでもないから面白い事もない。学校では英文学と仏蘭西語を専門にしてゐる。どうか勉強して帰国するまでに仏蘭西文学の大概を窺ひたいと思つて居る。僕には英文学の兎角に宗教的であるのに比して仏文学の優婉な処が甚しく僕の趣味に適して居ると自信してゐる⁽¹⁹⁾。

アメリカに行つたなら英米文学を研究するが本筋である。アメリカで英語でなく仏語を勉学の主たる目的にするのはいかにも荷風らしい。武田勝彦氏の調査によれば、カラマズのカレッジにおける荷風の仏語初級の成績は、「各学期、八七点、八十点、八四点と良好であつた」(『荷風の青春』)。好きこそもの上手なれで、荷風が日本で暁星の夜学校に通つて仏語を勉強した成果であろう。アメリカン・ドリームを実現するような立志伝的小説で満ちたアメリカ文学は、ゾラ流深刻小説に慣れ親しんだ荷風に體質的に合わなかつたのは当然のことであろう。

其の他には所謂アメリカ種の新刊小説四五冊読んだが何れも余の心には面白く感じなかつた。アメリカ種の小説はあまりに無邪気楽天的で、到底仏国露国の作物に接するやうな訳には行かない。去年の末から今年の春にかけて紐育で一番売れた小説と云ふのはThe Little Shepherd of Kingdom Come (キングドムカム)の少年羊飼)の一篇で此れは批評家が純粹のアメリカンノベルとなしたものである。文章は非常に好いやうだが趣向は例の如く子供らしい。山国の一少年が世間に出て幾多の辛酸をなめて大成功する立志小説である。成程此等がPure American novelと云ふのであらう。アメリカ人種が深奥なる思想を忌み一意専心唯実世間の成功熱にかられてゐる面影は甚よく此の一篇によつて推察する事が出来る。万事に余の如く文学的研究をなさんとするものにはアメリカは甚不便不適當である。其れ故此れと云つてお伝へ申す事も甚だ少ない⁽²⁰⁾。

フランス文学は「趣味に適して居ると自信している」(明治三十八年四月十三日付葵山宛書簡)荷風が、アメリカ文学を不適當と見なすのは至極当然である。「亜米利加に來りてより余が胸裏にはく藝術上の革命漸く起らんとしつゝ、」あつた荷風が、ゾラは體質に合わないと自覚してモーパッサンへと移つていく次の一節は注目に値する。

ゾラはあまり極端だよ。然しモーパッサン、ドデーあたり
の筆つきは僕の模せんとする処だ。僕には到底僕の性格上トル
ストイや何かの様な作物は書けない。仏蘭西的の華やかな悲劇
が僕には一番適して居ると自ら思つて居るのだ⁽²¹⁾。

「仏蘭西的の華やかな悲劇が僕には一番適して居ると自ら思つて
居るのだ」の箇所は、荷風の文学的進化を知るうえで非常に重要で
ある。荷風のアメリカにおける生活において、モーパッサンの発見
が最大の収穫であることは論をまたない。これがやがてモーパッサ
ンの石像にひれ伏して、「先生の文章を英語によらずして、原文の
まゝに味ひたいと思つたからです。一字一句でも、先生が手づから
お書きになつた文字を、わが舌自らで、発音したいと思つたからで
す」(『モーパッサンの石像に拝す』) 献辞に繋がるのである。『あめ
りか物語』の冒頭に掲げられたシャルル・ボードレーールの詩の一節
は永井荷風のフランス憧憬へのオマージュである。

Mais les vrais voyageurs sont ceux-là seuls qui partent

Pour partir; cœurs légers, semblables aux ballons,

De leur fatalité jamais ils ne s'écartent,

Et, sans savoir pourquoi, disent toujours: Allons !

(Le Voyage — Ch. Baudelaire.)

唯だ行かんが為めに行かんとするものこそ、
真個の旅人なれ。心は気球の如くに軽く、身は
悪運の手より逃れ得ず、如何なる故とも知らず
して常に唯だ、行かん哉、行かん哉と叫ぶ。

(旅—ボードレーール)

語調を整えるために「行かん哉、行かん哉」と訳したのであるが、
原文では〈Allons !〉となつていたので正確には「行かん哉」
だろうが、ここに荷風のフランス願望が結晶していると言える。荷
風のアメリカ生活は、結論的に言えば運命の神の手に徒に翻弄され
ながら結局は自分の夢を実現する機会となつたのである。少なくとも
もアメリカ滞在中に自分の生き方を必死に模索していた時には考え
られなかった結末を迎えた。明治四十年正月一日の『西遊日誌抄』
で綴つた日記は、荷風の当時の率直な心象風景だったのである。

正月一日 千九百〇七年とはなりぬ余は午近く起出ると共に
唯茫然また啞然として灰色に曇りたる新年の空を打眺めぬ。抑
も余が生涯何ぞかく意外の事のみ多きや。余の米国に来たりし
事既に意外なり。新大陸の諸処に彷徨し緑陰深き華盛頓の街頭
に囚らず金髪の一女に逢ひ遂に別るべからざる情縁に悩む。実
に意外なり。一度父の命により□□銀行の雇人となり算盤を把
る事早くも二年未解雇せられず。実に意外なり。余は今正に進

来れる千九百〇七年を如何に送り尽すべきか全く予想する事能はず。余は秋風に翻る落葉の如く運命の導く処に行かんのみ

Je vais où le vent mène,

Sans me plaindre ou m'effrayer,

Je vais où va toute chose,

Où va la feuille de rose

Et la feuille de laurier.

荷風は自分の人生を運命のなすがままに、「薔薇の花や月桂樹の葉のように、不平も言わず、たじろぐこともなしに風が運んでくれる場所に」流されていこうと一度は諦めた。しかし、父の配慮のおかげで、フランスのリヨンの銀行に転勤になった。自分に献身的に尽くしてくれた女性を弊履の如く棄て、次の言葉を残してフランスに旅立っていった。

余はイデスと共に永く紐育に留りて米国人となるべきか、然らばいつの日か此の年月のあこがる、巴里の都を訪ひ得べきぞ。余は妖艶なる神女の愛に飽きて歓楽の洞窟を去らんとするかのタンホゼルが悲しみを思ひ浮べ、悄然として彼の女が寝姿を打眺めき。あゝ男ほど罪深きはなし⁽²²⁾

- 註
- (1) 「全集」第四卷三〇〇頁
 - (2) 「全集」第十卷一一七頁
 - (3) 『永井荷風と東京』、江戸東京博物館、二七頁
 - (4) 秋庭太郎著『考證永井荷風』、岩波書店、三五頁
 - (5) 秋庭太郎著『新考永井荷風』、春陽堂書店、八〇九頁
 - (6) 「全集」第四卷一三六頁
 - (7) 「全集」第四卷三〇〇頁
 - (8) 「全集」第二十七卷六七頁
 - (9) 「全集」第四卷二三六頁
 - (10) 「全集」第六卷一一一頁
 - (11) 「全集」第二十七卷一一頁
 - (12) 「全集」第二十七卷一一〇一二頁
 - (13) 「全集」第二十七卷七頁
 - (14) 「全集」第六卷三五二頁
 - (15) 「全集」第六卷一八二頁
 - (16) 「全集」第四卷三〇一頁
 - (17) 「全集」第二十七卷六頁
 - (18) 「全集」第二十七卷六頁
 - (19) 「全集」第二十七卷一五頁
 - (20) 「全集」第二十七卷七頁
 - (21) 「全集」第二十七卷一二〇一三頁
 - (22) 「全集」第四卷三二五頁

(本研究は平成十五年度跡見学園女子大学短期大学部特別研究助成費による)